

マルコによる福音書6章7-56節 「不信仰による妨げ」

1A 使徒たちの宣教 7-13

2A ヘロデによる殉教 14-29

1B ヨハネのよみがえり 14-16

2B 俗悪な迫害 17-29

3A 弟子たちの心の鈍さ 30-52

1B 五千人の給食 30-44

2B 水上歩行 45-52

4A 群衆の表面的な信仰 53-56

本文

マルコによる福音書6章です。今朝、6章の1-6節を読みましたので、その後の7節以降を見て行きたいと思います。まず、6章の手前、5章での出来事を思い出してください。イエス様が、ご自身にある力を大きな形でお見せになった出来事が二つありました。レギオンという名の悪霊を追い出し、豚、二千匹がガリラヤ湖になだれ込んだという奇跡。そして、ヤイロの娘がよみがえったという奇跡です。ヤイロの娘のよみがえりの奇跡の前に、長血を患う女が癒された奇跡もありました。

7章にも、イエス様による大きな御業が書き記されています。ところが、ナザレでの出来事でもそうでしたが、イエス様のなされていることを、信仰をもって受け止めていないために、その奇跡が奇跡として受け入れられていなかった、ということが問題です。ナザレの人々にあった不信仰の問題は、人の向こうにある神の働きを見ないで、人そのものを見て行くという過ちでした。私たちはさらに、イエス様の働きと人々の反応から、その教訓を学んでいきましょう。

1A 使徒たちの宣教 7-13

7 また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて、彼らに汚れた霊を制する権威をお授けになった。

イエス様は、先に十二人の弟子をご自分の使徒として選ばれていました。それは、ご自分の働きはいずれ、彼らに託され、聖霊によってイエス様が彼らを通して働かれるからです。これまでは、弟子としてイエス様と共に時間を過ごしたのですが、これからはイエス様の働きを行う、協力者のようになっています。しばしば、イエス様との関係で三つの段階があると言われる。一つは、群衆です。イエス様のすばらしさに触れて、それについて行っています。次に弟子です。イエス様のところにいつもいて、イエス様から学び、その教えを受けます。そして、使徒です。使徒とは「遣わされる」という意味ですが、イエス様の福音を携えて、人々に伝えるために遣わされることです。イエス様について行くことを決めた人は、この三つの段階を踏みます。

そしてそこで大事なのは、「権威」が授けられていることです。自分の力や権威で、イエス様の働きをすることは無理です。また、イエス様がそれを求めておられません。百人隊長がかつて、「おことばだけいただければ、私のしもべは癒されます。」と信じましたが、イエス様の権威があれば、そこに力が現れると信じるのです。それはちょうど、ものすごい馬力のあるトレーラーのトラックを、女性の運転手がハンドル操作しているようなものでしょう。彼女の腕力ではないのです。

また興味深いのは、「二人ずつ遣わし始めて」とありますね。律法の中に、事実であると確認するためには、二人、三人の証人が必要であることを教えているので、二人が共に動くことを基本としていました。使徒の働きでは、ペテロとヨハネが共に動いている姿、またパウロとバルナバ、彼らが別れた時は、パウロはシラス、バルナバはマルコを連れていました。やはり、二人で動いていました。

8 そして、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻の小銭も持って行かないように、9 履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。

これは、不必要なものを持って行かないということです。主が導かれれば、そこに備えがあるということです。私たちが新しい領域に神に導かれる時に、「私にはこれがない」と言って、言い訳してしまいます。けれども、どんなときにも神に呼ばれて、導かれた時には、自分にそれがなくても、導かれます。

10 また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまりなさい。11 あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落とさなさい。」

中東では、人をもてなす文化があります。旅人であれば、必ず家に招き入れます。アラブの間には、まだこれがあって、全く見知らぬ人が戸を叩いたら、まるで以前からよく知っていたかのように、温かいもてなしを受けるそうです。それで、自分が福音宣教者であるということだけで、受け入れられたのであれば、主は必ずそこに平安を与えてくださいますが、もしそうでなければ、そのまま他のところに行くだけの話です。

その時に、「足の裏のちりを払い落とさなさい」と命じられます。これはユダヤ人たちが、異邦人の地からイスラエルの地に戻る時に、その塵を中に入れてたくないから、払い落とす習慣がありました。その慣わしを援用しているのですが、みことばを語ったのにそれを拒んだのであれば、もう既に伝えたのであるから、その責任は我々にはない、ということの意味しています。福音を語るとは、それを伝えるところまでが主に命じられており、その後の結果には責任は問われていません。ちなみに、これをパウロとバルナバは、ピシディアのアンティオキアで、二人を迫害した人々に対して

行なったことが書かれています(使徒 13:50)。

12 こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え、13 多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。

彼らは、イエス様が行なわれていたことを行なっていました。まず、悔い改めるように宣べ伝えていました。罪からの悔い改めです、そうすれば罪が赦されます。次に悪霊を多く追い出しています。私たちはこれをあまり目にしません、けれども、いつでも悪霊に遭遇したら、主が命じられたように追い出す働きはしなければいけないと思います。

そして、「油を塗って」病人を癒しているのですが、イエス様は油を塗ることはしておられなかったですね。油を塗ることは、当時、治療行為の一つではありましたが、それによって癒されるためではありません。あくまでも象徴的な行為であり、大事なのはそのことを通して信仰を働かせることです。人間的には、「病気は気から」という言葉がありますね。薬を製造する時に、治験において、うどん粉と、実際の薬をわざと飲ませて、本当に実際の薬による効用なのかを確かめることをすると聞いたことがあります。似たように、油を塗ること自体が人を癒すのではないですが、そうすることによって信仰を働かせて、そこに主がご介入されるのです。ヤコブの手紙には、これを教会で行いなさいと勧めています。「ヤコ 5:14-15 あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がらせてくださいます。もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。」

2A ヘロデによる殉教 14-29

このようにして、イエス様ご自身だけでなく、十二使徒によっても、主の御業が広がって行きました。そこで反応したのが、そのガリラヤ地方を統治しているヘロデ・アンティパスです。

1B ヨハネのよみがえり 14-16

14 さて、イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」15 ほかの人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらにほかの人々は、「昔の預言者たちの一人のような預言者だ」と言っていた。16 しかし、ヘロデはこれを聞いて言った。「私が首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ。」

イエス様の働きが広がるにつれて、ユダヤ人の間にはいろいろな評価が出てきました。エリヤ、というのは、マラキ書に、主が来られる前にエリヤが来ると預言があるので、そこを取り上げています。イエス様が十字架で、「エリ・エリ・ラマ・サバクタニ」と言われた時、エリヤを呼んでいるのだ

ろうと近くにいる人が思ったのは、そのためです。そして、「昔の預言者たちの一人のような預言者」というのは、モーセが言った預言です。自分のような預言者が出て来ると預言しました。

けれども、バプテスマのヨハネは、「私が首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ。」と言っています。彼は、深くバプテスマのヨハネと付き合っていました。そして彼が行なった罪、無実の者、しかも聖なる人を殺した罪によって、実体のないものを恐れて、怯えて生きるしかなかったのです。箴言にこんな言葉があります、「28:1 悪しき者は、追う者もないのに逃げるが、正しい人は若獅子のように頼もしい。」

2B 俗悪な迫害 17-29

17 実は、以前このヘロデは、自分がめとった、兄弟ピリポの妻ヘロディアのことで、人を遣わしてヨハネを捕らえ、牢につないでいた。18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものにするのは、律法にかなっていない」と言い続けたからである。

ヘロデ家というのは、本当にすさまじい家系でした。ヘロデ大王が、ローマの保護を受けてユダヤ人の住んでいる地域を支配する王でありました。彼が多くの妻を持ち、息子もできますが、彼は被害妄想のある男で、妻や息子たちを殺すも、その妻を恋い慕うようなことをしていました。「豚の方が、ヘロデの息子になるより安全だ」という諺ができたほどです。ヘロデ大王が、幼子イエスを殺すべく、ベツレヘムにいる二歳以下の男の子を虐殺した男です。

ヘロデ大王が死に、王国は息子たちに分割されました。その一人、ヘロデ・アンティパスがガリラヤ地方と、ペレア地方を統治していた領主になりました。ヘロデは、ナバテア王国アレタ四世の娘と結婚していました。ところが、異母兄弟であるヘロデ・ピリポの妻であったヘロディアを自分の妻にしました。ヘロディア自身、ヘロデ大王の孫娘の一人です。ここで大事なのは、律法では、妻に離縁状を出すのは夫であり、妻は離縁することができません。つまり、ヘロディアはピリポの妻でありながら、アンティパスの妻になったということです。つまり重婚という罪を犯していました。

さらに重要なことがあります。ヘロデ家は、イドマヤ人です。旧約時代はエドム人と呼ばれていましたが、イドマヤ人はユダヤ教に強制改宗させられていました。なのでヘロデは、改宗者であり、ユダヤ教徒です。ですから、神の律法を守らなければいけない身であるにも関わらず、姦淫の罪を犯していたのです。それで、ヨハネは真っ直ぐに語る人ですから、「律法にかなっていない」と言っているのです。

牢につないでいたところは、マケロス(マカエラス)という要塞です。死海の東側にあり、ペレアの領地です。ヘロデ大王は、偏執な人で被害妄想の激しい人でしたが、建築においては天才でした。その骨頂は、エルサレムにある神殿です。また、カイサリアにある埠頭を、海の中にコンクリートを

入れて造るという、当時してみれば信じられない技術を使いました。そして要塞ですが、彼は三つ作っています。マケロスのちょうど向こう側、死海の西にあるマサダがあります。そして、ベツレヘムの南にあるヘロディウムがありました。そしてマケロスです。私たちは2016年の旅で、その遺跡に上りました。王宮なのですが、その下に牢獄がありました。

6:19 ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、できずにいた。20 それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。

ヘロデのヨハネに対する態度は、とても興味深いです。彼は、自分のしていることが邪悪であることを知っていながら、正しい聖なる人であることが分かっていたから保護していました。自分自身の正しさは省みずとも、他の人で正しい人がいたらその人は保護しなければいけないと思うこと、ありますね。まず自分が神につながれよ！と言いたくなりますが。そして、彼自身、非常に当惑しながら、喜んで耳を傾けています。こう言った人は、カイサリアの総督にもいましたね。フェリクスです。彼はパウロを呼び出して、イエス・キリストに対する信仰について話を聞きましたが、「使徒24:25 パウロが正義と節制と来るべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする。」と言った。」とあります。

ヘロデにしても、フェリクスにしても、問題なのは「信じているけれども、信じていない」ということでしょうか。ヤコブ書に、悪霊でさえ神は唯一であることを信じているとあります。彼らはイエスが近づけば、恐れて、追い出さないように懇願するほどですが、自分を悔い改めて、神に自分を薛かせるところまで、聞くだけでなく、聞き従うところまでの信頼を寄せていなかったのです。

21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが自分の誕生日に、重臣や千人隊長、ガリラヤのおもだった人たちを招いて、祝宴を設けたときのことであった。22 ヘロディアの娘が入って来て踊りを踊り、ヘロデや列席の人々を喜ばせた。そこで王は少女に、「何でも欲しい物を求めなさい。おまえにあげよう」と言った。23 そして、「おまえが願う物なら、私の国の半分でも与えよう」と堅く誓った。

ヘロディアはヨハネを殺す良い機会を得ました。ヘロデの誕生日です。娘がいますが、これは、ヘロデ・アンティパスとの間の娘ではなく、ピリポとの間に生まれた娘で、サロメと言います。「娘」のギリシア語から、12-14歳の女性だと思われます。結婚可能な年齢です。そして、この踊りは官能的なもので、性欲を刺激するようなものです。恐ろしいと思いませんか？母親が娘に、父親の前で性的な踊りをしているのです。そして、ヘロデは褒美をあげようと言っています。

24 そこで少女は出て行って、母親に言った。「何を願いましょうか。」すると母親は言った。「バプテスマのヨハネの首を。」25 少女はすぐに、王のところへ急いで行って願った。「今すぐに、バプテ

スマのヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます。」

ヘロディアの狡猾さは、恐ろしいです。ヘロデの気持ちが変わらないうちに、すぐに娘を王のところに戻して、バプテスマのヨハネの首を要求させています。

26 王は非常に心を痛めたが、自分が誓ったことであり、列席の人たちの手前もあって、少女の願いを退けたくなかった。27 そこで、すぐに護衛兵を遣わして、ヨハネの首を持って来るように命じた。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女はそれを母親に渡した。29 このことを聞いたヨハネの弟子たちは、やって来て遺体を引き取り、墓に納めたのであった。

悲しい、悲しい出来事です。歴史家ヨセフスによると、斬首後の切断された遺体は、牢獄から出されて外に捨て置かれていたそうです。それをこっそりと、弟子たちが危険を冒して取りに行き、丁寧に埋葬したのでしょう。

ここから、イエス様の宣教の生涯が変わります。ちょうど今、中国で新しい体制になってから、キリスト教会への迫害が強まったことが言われていますが、そのような感じです。政治的な監視の目が厳しくなったのです。ユダヤ地方では、ユダヤ人の宗教指導者からの目がありますが、ガリラヤ地方においてはヘロデが目光らせるようになります。

3A 弟子たちの心の鈍さ 30-52

1B 五千人の給食 30-44

30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まり、自分たちがしたこと、教えたことを、残らずイエスに報告した。31 するとイエスは彼らに言われた。「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行って、しばらく休みなさい。」出入りする人が多くて、食事をとる時間さえなかったからである。32 そこで彼らは、自分たちだけで舟に乗り、寂しいところに行った。

マタイによる福音書には、ヨハネの死の報告をイエス様が受けたことが書かれています。イエス様は、どういうお気持ちだったのでしょうか？ヨハネに対してこのような仕打ちがあったのだから、ご自身には尚更のことと思われたのでしょうか。けれども、マルコによる福音書には、その報告の事は書かれておらず、使徒たちがイエス様の權威によって行った宣教の働きの報告をしにきています。そして、人々の出入りが多くて、食事を取る時間さえないことも見て、寂しいところに行きなさいと勧められます。イエス様は、ご自分のことは忘れて、まさに「我を忘れて」弟子たちの事を考えておられました。

寂しい所、というのは、人気のないところということです。主にある働きをしている中で、このよう

に人々のいるところから退いて、休むことはとても大切です。イエス様の御名によっていろいろなことを行い、人々と接している中で、それは喜びでもありますが、同時に疲れを持ちます。霊的な疲れです。そこで、主にあってそのような接触の少ないところに行くことは、霊的に大きな益です。

33 ところが、多くの人々が、彼らが出て行くのを見てそれと気づき、どの町からもそこへ徒歩で駆けつけて、彼らよりも先に着いた。34 イエスは舟から上がって、大勢の群衆をご覧になった。彼らが羊飼いのいない羊の群れのようにであったので、イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。

弟子たちは舟にりましたが、唯一、湖上で舟に乗っている時だけが、人々から離れてゆったりできる時でした。湖の岸辺を歩いて、その舟を見て追っかけている人々もいたのです。そして、ガリラヤ湖では、それが容易にできるので、向こう岸に着いても人々がその間に追いつくことさえできます。それで大勢の群衆がいました。「もう、やめてくれよ」と思うかもしれませんが、イエス様は、「深くあわれ」んだとあります。ギリシア語は有名ですが、「スプラクニゾマイ」、はらわたと関係のある言葉です。断腸の思いという言葉と似たものです。こうした思いを、自分自身がイエス様から与えられているか？問われます。

そして、「羊飼いのいない羊」とありますが、エゼキエル 34 章で、散らされている羊、羊飼いのいない羊たちのことが書かれています。痛み、傷を持ち、飢えている羊たちです。そして主ご自身が羊飼いになることが預言されています。それが、良き羊飼イエス様です。

35 そのうちに、すでに遅い時刻になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは人里離れたところで、もう遅い時刻になりました。36 皆を解散させてください。そうすれば、周りの里や村に行って、自分たちで食べる物を買うことができるでしょう。」37 すると、イエスは答えられた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」弟子たちは言った。「私たちが出かけに行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」

イエス様はずっと、いろいろ教えておられました。遅い時刻というのは、午後三時辺りだと思いません。日没になる前に食事を群衆のそれぞれが調達できるように、弟子たちはイエス様に相談しました。けれども、イエス様は「あなたがたが」調達しなさいと強調しておられます。先に、イエス様はご自分の権威を与えて、それでご自分の業を彼らに行わせました。これまでもイエス様は多くの奇蹟を行われましたが、ここはその中でも四つの福音書に書かれていて、大きな、代表的な奇蹟です。それを弟子たちに関わらせるために、イエス様はこのように自分たちで用意しなさいと言われていています。弟子たちは、それが 200 デナリ、200 日分の労賃です。成年男子で五千人いるので、女子供合わせると 1 万 5 千人はいたのではないのでしょうか？

38 イエスは彼らに言われた。「パンはいくつありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて来て言った。「五つです。それに魚が二匹あります。」

イエス様が彼らに要求されたのは、持っているものでした。その中でパンがどれだけあるか、そうすると五つでした。魚が二匹です。けれども、大事なことは、持っているものを差し出すことです。主は、持っていないものを差し出せとは言われません。けれども私たちはしばしば、持っていないものは差し出せないと言いながら、持っているものを差し出さないという言い訳にしています。

39 するとイエスは、皆を組に分けて青草の上に座らせるように、弟子たちに命じられた。40 人々は、百人ずつ、あるいは五十人ずつまとまって座った。41 イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて神をほめたたえ、パンを裂き、そして人々に配るように弟子たちにお与えになった。また、二匹の魚も皆に分けられた。

青草ですから、イスラエルでは季節は春です。そして組に分けることによって、弟子たちそれぞれが関わって、パンと魚に分けることができます。そして、この百人ずつ、五十人ずつという姿は、かつてイスラエル十二部族が、荒野で千人の頭、五十の頭、十人の頭と、それぞれ頭を定めていた(出エジプト 19 章)ことを思い出させます。そう、ここはイスラエルにパンを分け与えてくださった神がここにおられることを十分に思い出させることができます。興味深いことに、終わりの日、主が戻って来られてイスラエル人が東西南北から集められる時に、祝宴が開かれることが預言されていますが、そういった将来の幻も思い出させるものです。

そしてイエス様は分け与える時に、天を見上げています、神をほめたたえて、パンを裂いています。これは、ユダヤ教で良く祈られる祈りだったと思われます。「主、私たちの神よ、世界の王、地から出るパンを造られ、あなたが創造されたものすべてのために備えてくださる方。」こう祈って、食事を取ります。すると、全ての人々に行き渡りました。大事なのは、そこに弟子たちが関わっていたということです。イエス様が行なわれる奇跡に、弟子たちはそのど真ん中に置かれていました。

42 彼らはみな、食べて満腹した。43 そして、パン切れを十二のかごいっぱい集め、魚の残りも集めた。44 パンを食べたのは、男が五千人であった。

この満腹は、腹十分目のことです。お腹いっぱい、ちょっと戻そう！みたいなことです。それでも余ったのですが、パン切れのかごの数が、十二であったというのは象徴的です。イスラエルの十二部族、そして十二人の使徒のことを思います。

2B 水上歩行 45-52

45 それからすぐに、イエスは弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダに先に

行かせて、その間に、ご自分は群衆を解散させておられた。46 そして彼らに別れを告げると、祈るために山に向かわれた。

ここで、なぜ弟子たちを無理やり舟に乗せたのか？と言いますと、ヨハネ 6 章には、イエス様を王にして持ち上げよとしている姿が出てきます。この政治的なメシアの機運に、弟子たちを決して巻き込みたくないと思われたのです。そして、イエス様はこのことは何か危機的なものを感じたのでしょうか、父なる神に祈られるために山に向かいました。

47 夕方になったとき、舟は湖の真ん中にあり、イエスだけが陸地におられた。48 イエスは、弟子たちが向かい風のために漕ぎあぐねているのを見て、夜明けが近づいたころ、湖の上を歩いて彼らのところへ行かれた。そばを通り過ぎるおつもりであった。

イエス様は、おそらく陸地におられた時に、月が照らしていて彼らの姿を見ることができたのでしよう。そして、向かい風ですから長いこと時間がかかっています。「夜明け」とは、もう午前3時から6時です。その時に、なんと湖の上を歩かれます。そして、「そばを通り過ぎるおつもり」とありますね。これは、モーセの時、彼が岩の裂け目にいて、それで主の栄光が通り過ぎたということをおもひ起こします。先の五千人の給食は、主がイスラエルの民に荒野で備えられたことを思い出しますが、ここでは主の栄光が通り過ぎられることを思い出します。

49 しかし、イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは、幽霊だと思い、叫び声をあげた。50 みなイエスを見ておびえてしまったのである。そこで、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言われた。

イエス様が、「わたした」と言われるのは、何を思い出しますか？そう、「わたしは、わたしというものである」ということです。ここでも主がモーセにご自分の名を明かされた、その言葉が使われています。ここでの働きは、イエス様がイスラエルの神ご自身であることを明らかにしているものです。

51 そして、彼らのいる舟に乗り込まれると、風はやんだ。弟子たちは心の中で非常に驚いた。52 彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである。

ここが、最も大事な箇所です。どうでしょうか、弟子たちは五千人の給食の奇跡で、そこにイエス様がどのような方であることを知ることができましたが、できませんでした。それで、イエス様が神から来られた方であることをまだ知らなかったのです。水の上を歩かれるということが全く驚くようなことであったのは、五千人の給食にあるイエス様の神性を悟っていなかったのです。

この「頑な」というのは、以前、片手の萎えた者をイエス様が治される時に、彼らの頑なさを嘆

き悲しんだ(3:5)のですが、それと同じ言葉が使われています。弟子でさえ、このように心が頑なになることがあります。主が共におられ、主が事を行われていたとしても、それでも、分からないということがありうるのです。ここから私たちは何がわかるでしょうか？信仰とは、積極的に、意欲的に働かせなければいけないということです。漫然としていれば、主が働かれているのに、それに全く気付かないということはありません。

ナザレでの不信仰、それからヘロデのヨハネ殺し、そしてこの奇蹟が悟れていないこと、すべてが主の大いなる業があるのに、それを感謝できなかったり、悔い改めなかったり、応答していないのです。

4A 群衆の表面的な信仰 53-56

53 それから、彼らは湖を渡ってゲネサレの地に着き、舟をつないだ。54 彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気がついた。

夜が明けて、岸边に着くと、そこはゲネサレの地です。ここは、ガリラヤ湖の北西の辺りです。

55 そしてその地方の中を走り回り、どこでもイエスがおられると聞いた場所へ、病人を床に載せて運び始めた。56 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。

走り回って、イエス様の追っかけをしたようです。この病人の床は、貧しい人たちが使うもののようで、どんな人でもやってきたようです。そして、衣の房にでも触らせてもらえるように広場に寝かしています。すごい光景です、けれども使徒の働きでは、ペテロによってこのような大きな業が起こりました。イエス様が権威を与え、共におられたからです。そして、彼らが衣の房に触るところが、長血をわずらう女の話が広まっていたのかもしれない。衣の房に触れば、それで癒されるという信仰です。

癒しを求める人々は、その具体的な信仰によって癒されていきます。けれども、それでもイエス様は癒しの働きを行われていました。しかしイエス様を個人的に知ろうとする人は少なかったかもしれません。大勢は、ただ癒される事だけを求めていたかもしれません。

私たちは、イエス様が行く年、来る年もおられて、働いておられることを知っています。いや、知っていても信じてないといけなんでしょう。主が奇蹟を行われます、それを信じましょう。